

2005～2006 年度、日本の白鳥群の動向に関する初期的な情報整理

関東地方からの情報発信 皆様へ情報収集と調査にご支援をいただきたく、よろしくお願いたします。

日本白鳥の会 荒尾 稔

関東地方では

2006 年 1 月末現在で、千葉県下には、コハクチョウを中心にして印旛沼本埜村周辺に 1,350 羽以上、九十九里、銚子に近い東庄町の夏目の堰に約 400 羽ほどが渡来しています。千葉県下では、この 2ヶ所だけで、1,750 羽前後の渡来数となりました。

この中で、本埜村の白鳥群は、渡来数の増加率から、換算しての渡来数（計算上想定される数）が 1,050 羽でした。残り 300 羽が、東北の寒波に追われて、1 月に入って追加的に渡来した数量です。

そこで、今回の総会の発表としては、「2006 豪雪」と呼ばれる今回の事態を、どのように考えていくべきか、情報を整理していくかの考え方を発表させて頂き、皆さま方からのご意見と、できましたら全国調査としてご参画を頂けないかと考えております。

千葉県夏目の堰の個体群はどこから

問題は、東庄町の夏目の堰の個体群がどこから飛来したかです。
一つのヒントは、本埜村の個体群が、おとなしく餌をまつタイプで、まさに給餌された状態の群れであること。

対して東庄町夏目の堰の個体群は、昼間は全て出払って、不在となり夕方 5 時以降に三々五々小さな群れをなして、近在の田んぼや、遠方から帰着する、自立した野生状態のコハクチョウの個体群と言うことです。

これは観察者から見て、その違いが明瞭で驚嘆すべき違いです。そこで、この群れは、どこから飛来したのかが重要となってきました。

一つの大きな可能性として、日本海側、特に新潟県の下越地方の個体群ではないか。
具体的には、瓢湖等を塙とする個体群ではないかと考える意見があります

今年は日本海側での 12 月の豪雪で田んぼや湖沼が雪に覆われ、結氷してしまい、雁・鴨・白鳥には、越冬が極めて厳しい状況となっています

最大の要素は、新潟県下でのコハクチョウの急増と、野生化と、この雪による餌場と塙の喪失によって、一気に冒険に出だしたことです。

主に新潟のコハクチョウや一部の雁類が 12 月中旬以降、大きく移動を開始したと考えています。そのなかで、一部の個体が太平洋側へ移動してきた可能性があると考えられます。

そこで、現在千葉県への白鳥群の渡りに、日本海側からの新しい渡りのルートが一部出来上がったのではないかと意見もあります。一度出来てしまうと、これから毎年、千葉県下には、雁・鴨・白鳥群の大量渡来の可能性もあると思われます。

以下は想定図です。

かつてない 12 月の大寒波と大雪で、2005 年 12 月中旬から、白鳥たちも覚悟を決めたごとく、下記のあらゆるルートで家族群単位で、ばらならんと南下を始め、途中からは一気に移動してきたと考えています。いくつかの移動ルートが考えられる中で、

- (1) 谷川岳を越えて、利根川本流を下るルート
- (2) 阿賀野川から、猪苗代湖周辺を経て、那珂川を下って関東地方へ
- (3) 信濃川ルートで長野へ、そこから千曲川沿いに山脈を越えて、関東地方と静岡方面に抜けるルート
- (4) もう一つは、同じ長野県から天竜川や木曾谷を下って、岡崎や名古屋方面へ抜けるルート

いずれも、谷筋を川の源流目指して飛んで、最も低い尾根（峠）を抜けて、山を下るという性質があります。先日来、(3)に該当する、その移動ルートと思われる情報が届きだしています

東京都の多摩川中流・上流域での白鳥や雁類の情報がなくなって、それこそいくつも発生してきています。そのなかの記載で、まず奥多摩の秋川と多摩川合流点での白鳥の渡り等の目撃談が 12/20 ころから 12/末にかけて複数生じています。

小さな群れ(家族群?)単位で、4~20羽程度の群れが、次々と上空を通過したとのことで、たまたま複数以上の目撃がされています。結果から、相当な規模のコハクチョウの通過があったとほぼ確認される状況です。

そこで、もしかしたら100年ぶりくらいに、日本海側から、信濃川→善光寺平→千曲川→小諸→秩父甲武士ヶ岳→雁坂峠→雁峠→奥多摩→多摩川→東京湾→千葉県への渡り鳥のルートが復活した可能性もあります。

奥秩父連山には、千曲川の源流部をたどっていくと、一直線の位置に雁坂峠、雁峠がありまして、これを越すと奥多摩から多摩川へとつながります。

さらに、南には「雁のはらすり岳」があります。このルートは静岡県へ抜けるルートと考えられます。実は、今年度は、コハクチョウ群が静岡県下でも各地にも渡っています。

100年以上前、往事は、ここを大量の雁・鴨・白鳥が峠を越えていたのは事実のようです。最近、すっかり使われなくなりましたが、今年の大雪で、新潟の白鳥群が大挙移動した結果だと考えられます。

東京都神奈川県の境を流れる多摩川では、一部は12/20頃から、秋川と多摩川の合流付近で目撃が相次ぎ、1羽は秋川と多摩川の合流点付近で定着し、6羽は杉並区の善福寺公園で、数羽は、東京都野鳥公園に渡来しました。それらが東京湾を横断し、市川に到達し、葛西臨海公園などでも観察されています。

1月の生物多様性センターによる「ガンカモの全国調査」では、11羽のコハクチョウと6羽のヒシクイがカウントされました

その多くがさらに飛び続けて九十九里に到達し、茫洋たる海に出る手前の陸地、九十九里の各地に三々五々舞い降り、餌場と埒を探し回っていたところで、だんだんと大きな群れになり、最後に「夏目の堰」に到達し、ここを埒に定めたというドラマの筋立てが想像されます。

相当数はそのまま太平洋に飛びだして海没、一部が何と小笠原諸島にたどりついたのではないかとの考えられます。大部分はあわてて戻った先が九十九里であった可能性も。白鳥群にとって厳しい結果が予想されます。

コハクチョウでは餌付けされた個体群と、野生の個体群は明らかに行動原理が異なります

野生に戻った(生活の自立化)この様な個体群が日本海側で激増し、この冬の大雪で、餌付けされていない個体群が、餌場を失い、一気に動いたと考えられます。その背景には、コハクチョウの増加によって、環境が過密状態に陥っているとも考えられます。(新潟県だけで、推計15,000羽!)

4 今後とも、毎年家族群(両親と非繁殖亜成鳥と当歳の幼鳥で構成される?)単位での冒険旅行がこれから続々と繰り返される可能性が高いと考えられます。個体群密度の高さが、影響して、新たな越冬地を探そうという動機付けが若者、家族群に生じたとも考えられます。

5 例えば、新潟県阿賀野市にある、白鳥で有名な瓢湖では、12/20以降、約1,300羽のコハクチョウが減少して、飛び先不明になっています。ここは、今、多くのコハクチョウが埒としての利用で、早朝飛びだし、夜遅く埒へ多数の家族単位で、三々五々帰ってきています。幅広く阿賀野市の田んぼ地帯で採餌しています

夏目堰でのコハクチョウ群の行動様式は、今の瓢湖のコハクチョウ群と大変よく似ているようです。

瓢湖管理事務所の担当者が「うちのコハクチョウだ!」といみじくも言われたのとも符合しています

本年度の渡来状況調査

■ 埼玉県では、「ガンカモの全国調査」で本年度の県内白鳥総数が、昨年度の136羽から363羽へと.25倍以上激増。旧川本町の上流域で、越辺川と飯森河野合流点の川下地区に新たな埒が形成されたそうです。

埼玉県生態系協会 堂本さんからの伝聞情報

■ 茨城県土浦市霞ヶ浦湖畔の蓮田に、コハクチョウを主体に100+が、突然渡来し、定着した。

ここには、以前から10+のコハクチョウ(冬期に渡ってくる個体)がおり、その姿を見て安心して舞い降りた模様です。

■ 栃木県大田原市内の那珂川流域に、100羽ほどの、新たな埒が形成され、同時に栃木県内では、至るところで、4~8羽単位(家族単位と思われる)でコハクチョウが渡来定着しているという状況

上記2点

アサザ基金千田さん情報

■ 静岡県の豊橋と田原の市境そば(三河港大橋田原側近く)で1月上旬から、ロシア方面より越冬のため日本へ来る事で知られる白い冬鳥「コハクチョウ」が30羽以上まとまって渡来。近年では04年冬以降、豊橋市の神野新田町や田原市の汐川干潟でも数羽単位で観察された。最近、吉田城跡下の豊川内で12羽が目撃されるなどの話題もあった。

東海日日新聞 (2006-01-13)